

# 風土



## 餅買ふや百姓に齒に衣きせて

〔含羞〕より昭和二十二年作

鶴川村（現町田市）に疎開して間もない頃で、桂郎師は職にもつけない状態でした。手塚美佐氏の『石川桂郎集』（俳人協会刊）によると、見かねた「鶴」の石塚友二の発案で、鎌倉に住む文士や漫画家、小田急沿線にある工場出版社、新聞社、友人、知人宅などへ出張理髪をして、その日の収入を得ていたとあります。そのお金で正月の餅を近所の農家から買うのです。本当は「齒に衣着せぬ」性格の桂郎師が、家族のために「齒に衣きせて」餅を分けてもらおう姿が情を誘います。

## 師の聲のある日の聲を冬の鴉

〔含羞〕より昭和二十二年作

この句には「横光利一逝去」の前書があります。桂郎師は石塚友二を介して横光利一の門をたたき、小説を学んでいます。利一も晩年は俳句に親しみ、波郷や友二、桂郎師らと句会を楽しんでいます。「ある日の聲」を「冬の鴉」に重ねて、利一の叱咤の声を想い起しているのです。利一、四十九歳の死でした。

## いのちなり西行と佇つ青嵐

〔句集『月の道』より平成十六年作〕

この句は静岡県南部の掛川市にある東海道の難所「小夜の中山」を詠んだものです。「いのちなり」は西行の歌「年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけりさ夜の中山」を踏まえています。西行六十九歳の時の歌で、二十三歳の時越えた中山峠を、再び越える感慨を吐露したものです。器師はこの時七十七歳です。この峠に立ち、雄々しい「青嵐」を目の当たりにして、老西行の魂と交感せんと「いのちなり」と声を発したのです。

## 夏空に小倉百人一首撒く

〔句集『月の道』より平成十六年作〕

この句には「藤原定家の時雨亭跡」の前書があります。時雨亭は、定家が「小倉百人一首」を選んだ山荘です。嵯峨の二尊院から登る小倉山の中腹にあります。器師は時雨亭跡に佇み、定家は数ある歌の中からどのようにして百首を選んだのか想いを馳せたのです。その一首一首を夏空へ向け請んじながら、ふと「撒く」という言葉が浮かびました。

賢治よ 南うみを

雀らのころがるために刈田あり  
夕鴉にたひらな田んぼあるばかり  
芒野のところどころに峡の畑  
冷ややかになぞへの畑の忘れ鍬  
鹿垣に媪とらはれある如し

道問へば菜虫つまんでゐるところ  
舟渡る賢治よ畦にうつむくな  
在まつり手押し車の混み合うて  
魯田を神経質な風わたる  
虫の闇黄泉へいざなふ声まじる  
くちばしの鋭く曲がり冬来たる  
葱洗ふ母の遺せし石に堰き

(ウエップ俳句通信一九号掲載句を含む)



# 竹間集

同人作品



立 冬

中根 美保

減るほどに鳴る水筒や柿日和  
標本の蝶は朽ちずにそぞろ寒  
初鴨の羽より何か掻き出だす  
桑の木の剪り口に冬立ちにけり  
曇天に遠嶺浮かみて冬ぬくし  
立ち泳ぐ動きにも似て雪蛭  
大股に来て懇ろに炉火熾す

芋の露

間島あきら

またひとり逝くを見送る十三夜  
一言に通ふこころや秋桜  
種結ぶあさがほがんじがらめかな  
荒野行くちりと地のご糸虫の声  
峯峰の尖れる秋の深さかな  
直登の三四段秋しぐれ  
芋の露割れて分かれてまたひとつ

小鳥の木

内藤 静

豊年のもんじやに躍る削り節  
雲を出てさらに雲へと後の月  
長雨のはたて明るき黄葉かな  
見あぐれば小鳥生る木となりてをり  
神の留守藁のおろちの酔ひつづれ  
寸鉄のことばを隠したうがらし  
千切れては飛んでゆく雲新松子

いつの間に

土井ゆう子

鰯雲つつがなくをり手を洗ふ  
岳晴るる日や新米の初出荷  
爽やかや湖へ向く椅子ふたつ  
舞茸飯いつの間にやらダイヤ婚  
星月夜湯宿それぞれ橋かかり  
捜しものどこ捜しても秋の風  
ハロウィン一ト日遅れの南瓜炊く

初秋刀魚

森高 武

海半分青空にして神の留守  
黒松の浜街道や鰯干す  
関の径休みながらの初紅葉  
浜菊や灯台見えて遠かりし  
水揚げは二ヶ月遅れ初秋刀魚  
にんにくを先ずスライスに秋刀魚刺  
浜風に帽子飛ばされ冬隣

あき子忌

浜 福恵

海抜500地点の秋に唾呑むつばき  
天高し鳶の飛翔を下に見て  
秋潮を漁舟は舵を南へみなみ  
骨疼く霜降る夜ぞふるさとは  
入潮や野葡萄は色かがやかす  
母の忌の野に出で摘まむ野紺菊  
あき子忌や読み廻したり「見舞籠」

十三夜

門伝史会

棚雲に丹沢浮かぶ豊の秋  
なかぞらに考へてゐる赤とんぼ  
百年の校史繙く秋深し  
床の間に仙?の文字秋闌くる  
金木犀散りて大樹の円画く  
絵手紙に無沙汰を詫びぬ秋微雨  
十三夜草木の影のしめり持つ

今日の月

鈴木石花

窓際を漣のごと赤蜻蛉  
背を壁に姿勢正すや鳴の声  
コロナ禍の終息願ふ今日の月  
到来の薄紙纏ふ美濃の柿  
灯火親し娘のエッセイ読み返す  
付下げをロングドレスに秋の宴  
菊月や前倒し祝ぐ娘の成人

手袋

山田暢子

マスクして言葉を少し忘れけり  
手袋を買つてすぐ嵌めもう帰る  
ねんねこもかめのこも無し令和の世  
裸木となればあらはに幹の疵  
椋鳥の群れ怖ろしき夕べかな  
寒き夜はひとの言葉が疼きだす  
億劫になりたることに冬支度

芋水車

岩木茂

秋天に立つ大熔岩の上に立つ  
桐は実には熔岩の間ひの畑打てり  
観音の山の無患子ほのぬくし  
猿柿や修験の峰の明らかに  
蛇笏忌の露に触れぬる指の先  
押し合ふ水ぶらさがる芋水車  
海暮れていま月光の曼珠沙華

鯛雲

小林輝子

畑草に秋の夕焼のやはらかし  
動くとも見えずに消ゆる鯛雲  
大方は芒野となる開拓地  
山葡萄喰ひし熊の糞やたら  
国道の脇熊棚の真新らし  
衣被小鉢にふたつ独りの餉  
奥羽嶺の奥より出で来鯛雲

# 山河集

同人作品



## 南うみを選

秋爽や雲の影置く五十鈴川  
秋深む力籠めたるシテの足音  
読の「天声人語」良夜かな  
身に入むや庭師の刻む剪刀音  
行く秋や螺鈿の筥にははの文

上村葉子

嵩をなす骨の白さの朴落葉  
小鳥来る童地蔵の寝そべりて  
紅白の嫁入りトラツク豊の秋  
鳩餅のにつき売り切れ神の留守  
ぐい飲みに心ほどけて菊脍

奥田茶々

輝ける稲穂に笹の音を聞く  
流木か獣の骨か秋の暮  
天高しレールは永遠に交はらず

瀬戸薫

後ろへは跳べぬ飛蝗の後ずさり  
晩秋の帽子目深き農婦かな

下山田美江

戸隠山の一の鳥居や落葉雨  
秋日影列車水面をがたがたと  
大砲の首の下過ぐ神無月  
コスモスや三卓ばかりの喫茶に居  
青北風や半身入らぬ回覧板

中嶋陽子

秋空や入場門を樹下に立て  
秋風やソーラン節の太鼓の音  
葡萄にも家系図のあり巨峰食ぶ  
葡萄二房裾分けの白き皿  
解けてはかたまり解け花芒

三密を避けて

門伝 史会

三密を避けてひと日の秋を踏む  
港北七福神第一番鴟の声  
参道に緋色白色曼珠沙華  
山門へ人影の透く雁渡し  
曼珠沙華群れて孤高の彩放つ  
風化せし塚に知行や萩は実に  
仏相の石を灯せり蔦紅葉  
前立観音衣の襞に秋日影

一燭の堂の昏さに秋惜しむ  
山紅葉高速バスに客疎ら  
折詰の蓋の飯粒爽やかに  
秋天を丸く切りたるとんびかな  
沢桔梗木栈道の観察路  
湿原の水音に咲きて黄鈞船  
吾亦紅揺るる先より人のこゑ  
秋七草憶良の歌をくちづさみ  
神代杉眠り続ける水澄めり  
見渡すといふ大景に花芒  
芒波光の束に風の筋  
追悼の雲に声あり芒原

## 風土独語／南 うみを



秋深む力籠めたるシテの足  
上村 葉子  
能は他の演劇に比べ極端に動きが少ないです。そこで一挙手一投足の動きが大事になってきます。作者は「シテの足」に注目し、「力籠めたる」に歌舞劇のだいご味を味わっています。季語の「秋深む」も演目を暗示しているようです。

手術して枯蠟螂の声発す  
根岸 善行  
ここの「枯蠟螂」は比喻として使われています。季語の比喻表現は実体感が薄くなるので難しいですが、作者はあえて挑戦しました。手術に真向かう己の姿を表現するには、「枯蠟螂」しかありません。「声発す」も緊迫した状況を伝えています。

鳩餅のにつき売り切れ神の留守  
奥田 茶々  
京都から大原を経て若狭へ抜ける街道に三宅八幡宮があります。その参道にある「双鳩堂」は昔から「鳩餅」で有名です。その「鳩餅」三種の内「につき」味が売り切れました。季語の「神の留守」との離れ具合が適度で佳いです。

障子貼り白き日暮れの来りけり  
小原芙美子  
この句は障子を貼り替えた後の心の有り様を「白き日暮れ」と表現しています。真新しい障子に囲まれて座っていると、日暮れも忘れてしまうぐらいです。「白き日暮れ」の措辞が佳いです。

## 風土集



## 南うみを選

月光へ木の葉手裏剣走りけり  
上尾 根岸 善行  
振り返きて誰も居らずや十三夜  
十三夜路地より真砂女万太郎  
手術して枯蠟螂の声発す  
転がつてゆく風の子の木の葉かな  
嫺やかな風をまとひて花おくら  
舞鶴 小原芙美子  
秋うらら向きあうて寝る羊の仔  
ペットボトルと帽のせてある今年藁  
障子貼り白き日暮れの来りけり  
冬晴へ長子の乳歯抛りあげ  
神楽殿色なき風と松籟と  
千葉 上村 葉子  
落葉時雨人影のなき忠霊塔  
盛り塩に白萩零れ蕎麦処  
鎮まりて秋気の満つる五十鈴川  
月明に長き影引くポプラかな

天高しレールは永遠に交はらず  
瀬戸 薫  
有季定型の俳句は季語の新たな表情をいかに掴まえるかに掛かっています。「天高し」は青く澄んだ秋空をイメージさせる明るい季語です。しかし作者は「レールは永遠に交はらず」と暗い心性を取り合わせました。この屈折が新たな世界を提示しています。  
長靴の中敷き新た冬支度  
石井美智子  
私たちは雨の日以外は長靴は履かず、わざわざ中敷きを入れません。しかし作者にとつて「中敷き」を新しくすることが「冬支度」なのです。雪国ならではの「冬支度」のひとつです。  
秋日影列車水面をがたがたと  
下山田美江  
この句は、秋の日差しを浴びながら走る列車を描いています。面白いのは「水面をがたがたと」のオノマトペです。本当はレールをがたがたと走っているのですが、水面までが列車の過る音に揺れ騒いでいるかのようです。  
さくと噛む雷おこし一葉忌  
杉本葉王子  
忌日の俳句は故人を彷彿させる世界を作るか、その頃の季節感を出すかに分かれます。作者は彷彿させる方法を取りました。「雷おこし」は浅草名物で、「名を起こす」に由来するとされ、縁起物にもなっています。一葉も「名を起こし」たいと、齧ったのかもしいれません

目の大き埴輪の空を鳥渡る  
東京 奥田 茶々  
豊穣の石榴古木のよぢれかな  
砂時計添へてコーヒー秋思かな  
網代笠かけて露けき一草庵  
伸び上がるからくり時計小鳥来る  
謎解けて頁をたたむ夜長かな  
秋田 石井美智子  
樹下に撒く米のとぎ汁一位の実  
ドボルザーク流るる夕べ秋深し  
長靴の中敷き新た冬支度  
軒に干す箆に薄き日冬隣  
さくと噛む雷おこし一葉忌  
京都 杉本葉王子  
八穀米粥の名前は神無月  
貴婦人の爪てふ葡萄緑濃き  
桂郎も源義も服す猿茸  
賓頭盧さん触らず帰る秋の暮